

巻頭言

言葉が訪ねてくる瞬間

俳人 黛 まどか



●まゆすみ まどか●

俳人。神奈川県生まれ。「B面の夏」50句で第40回角川俳句賞奨励賞受賞。「日本再発見塾」呼びかけ人代表。近刊に『あなたへの一句』（バジリコ）、『文豪、偉人の「愛」をたどる旅』（集英社）等。メルマガ「週刊まどか歳時記」を毎週日曜日朝10時に無料配信中。
公式HP <http://madoka575.co.jp/>

お正月のイメージに関連して、拙句を挙げます。

東京がじつとしてゐる初景色

この句は数年かかってできました。

東京も、お正月にはひっそりとしませす。多くの方が里帰りしたり旅行に出かけたりして、ぼかんと留守になったようです。いつものビルも駅も通日もまったく違った雰囲気、街全体が独特の感じに包まれます。

私はこんな「東京の初景色」を詠みたくて、言葉を探しました。

「東京が静まりかえる初景色」、これではポエジーのかけらもありません。

「東京の人みな帰る初景色」、これも単なる説明、理屈です。

毎年毎年、お正月を迎える度に、東京である独特の感じを味わうのです。それなのに言葉がみつかりません。句にはなっていませんでしたが、「東京の初景色」はまるで頭痛の種のように始終私の頭の片隅にありました。

そんなある日、東海道線に乗っていて、電車が緊急停止してしまったことがありました。電車はいつまでたっ

ても動きません。そのときふっと、東京の初景色が頭に浮かびました。まったく動かない静まり返った東京……。「『じつとしている』だ！」

こうして数年越しで、一句は完成しました。

やゝありて流れはじめし雛かな まどか

これも、「やゝありて」がやって来るまでに苦労した句です。

鳥取県用瀬町の流し雛は全国的に有名です。さんだわら供物や供花と共に載せられた紙の夫婦雛。人々の災いや穢れを引き受けて、千代川を流れていく雛です。和服を着た幼い女の子に交じって、私も雛を流しました。雛を水面に置くと、皆掌を合わせて息災を祈ります。

水面に置かれた雛はすぐには流れていかず、しばらくは川の縁を漂って、やがて流れに乗っていきました。このしばらくの間に、私はなんとも言えない情趣を覚えたのです。雛はためらうようにも、別れを惜しんでいるようにも見えました。雛と少女の間に交歓を見たのです。

「しばらくは縁を漂う雛かな」などと、様々に表現してみたのですが、どれもしっくりきませんでした。

「やゝありて」という言葉を得るまでは産みの苦しみでした。

『俳句脳～発想、ひらめき、美意識』茂木健一郎氏と共著（角川書店）より



鳥取県用瀬町の流し雛

目次

言葉が訪ねてくる瞬間 黛 まどか 1

「荒れ」の克服から「いい学校」づくりへ
～学校と保護者・地域との協働～ 2~4

丹松美代志 大阪府池田市立石橋中学校校長

～学校と保護者・地域との協働～



丹松美代志
大阪府池田市立
石橋中学校校長

はじめに

「次の保護者の方がお待ちです。」長い保護者面談の後、別の保護者の方が相談に見えた。次々に保護者の来校を受け、こんなに頻りに相談に乗るのは校長11年目にして初めての体験である。「学校の信頼が崩れている。」ことを実感せざるを得ない4月のスタートである。昨年度、私は校長として3校目の現任校に赴任した。

本校は、生徒数403名・15学級、校長・教員31名の創立32年目の学校である。この数年、生徒の「荒れ」に直面し、教職員は精一杯職務に励み、「これ以上、何をせよと言うのか」というのが本音であった。私鉄沿線の小さなターミナル駅前の古くからの商店街を核に、南北3キロに細長く伸びる校区である。人なつっこい生徒、学校に関心の強い保護者、学校に協力的な地域である。

「荒れ」の克服のヒントは足元に

今春卒業した3年生は126名。入学時から生活規律を身につけていない生徒が目立ったという。5月の中間考査は、生徒がなかなか着席せず、まともに実施できなかった。生徒の暴力行為も頻発した。学年教師集団は、粘り強く生徒・保護者に接し、つながりを深めてきた。規律は身につけていないが、大人不信から確実に大人を信頼するようになりつつあった。彼らが5年生の時、一人の担任教師が犯罪を犯し、退職を余儀なくされるという出来事があった。

【国・府・市の事業の積極的活用】・第7次定数改善（指導法の工夫、改善：数・理・英）・学力向上推進校・DS活用調査研究校・おおさか学び舎事業・学校支援地域本部事業

【つながる・つなぐ】・生徒とつながる（生徒理解・信頼・指導）・保護者、地域とつながる・関係機関との連携～学校を開く～

「荒れ」の克服から「いい学校」づくりへ

【授業づくり】・ビデオによる事例研究・すべての授業の公開・公開研究会～生徒の学びの成立をめざして～

【小中連携・一貫教育の推進】・校長・園長の交流・いきいきスクール（兼務発令）・中学校区としての「小中一貫教育推進校」

石橋中学校のめざすもの（概念図）

学級は荒れ放題で、まともに授業が行われていなかった。確かに生活課題の重い生徒が目立つ。そこにこそ、公教育の役割がある。家庭事情がどうであれ、学校はすべての生徒の学力を保障する責務を担っている。校長はその先頭に立つ。

儀式や生徒朝礼での講話は、校長の授業の場面である。そして、日々の休み時間、部活動の大会の応援、宿泊行事等、あらゆる機会を捉えて生徒とつながり、生徒理解を深め、校長としての支援策を考えた。「荒れ」の克服の出発点は、深い生徒理解に基づく生徒の受容である。力の論理は必ず破綻する。そのことを本校の昨年の3年教師集団は体現していた。それを学校総体のものにしてこなかった点が本校の最大の課題であり、校長の責任である。けっして、生徒・保護者だけのせいではない。教師が変われば生徒が変わる。勿論、教育委員会や関係機関との連携と支援を得た上でのことではあるが・・・。

学校を開き、取り組みをアピール

保護者からも地域からも苦情を言われることの多い学校の立場を変えようと考え、学校の持っている情報はできる限り公開し、校長の経営方針の理解が



放課後自習教室（ホップ）



土曜寺小屋（どてら）

進むように努めた。学校からの便りをなかなか保護者に手渡さない生徒が多いことに鑑み、携帯メール配信を始めた。重要な配布物のある時は、必ずメール配信する。勿論、緊急時にも活用する。学校新聞・PTA新聞に加えて、学校便り・学年便りの発行、ホームページの更新、そして、オープンスクールの実施を進めた。その一方で、保護者に関心の高い学力向上の取り組みとして、国や府の新しい施策はできる限り活用し、人的・物的な支援を得るようにした。教職員には負担を強いるものもあったが、校長の判断で即決した。

学力向上に関しては、従来より教職員定数の第7次改善により、数学・理科・英語について各1名の加配教員の配置を得ていた。生徒指導対応に追われがちであった加配教員を本来の少人数指導やチームティーチングに活用し、本年度より、新たに国の新学習指導要領促進事業を活用して理科の非常勤講師の配置を得て、理科の少人数指導の充実を図っている。また、昨年度より、大阪府の学力向上推進校と携帯ゲーム機活用調査研究校に手を挙げ、学校として学力向上に取り組む姿勢を明らかにした。加えて、2学期に始まった放課後のおおさか学び舎事業に積極的に取り組み、毎週1回、3年生34名が自学自習力の伸長をめざす「ホップ」に参加し、学力の底上げを果たした。

「ホップ」には、3年担当の教師のほか、地域の方の支援を得た。また、昨年度3学期より、国の学校支援地域本部事業に取り組み、毎週土曜日に土曜寺子屋「どてら」を実施し、本年度は、在籍生徒の5分の1近い114名の生徒が参加している。指導のポ

ランティアスタッフは現在50名にのぼり、学習塾の支援も受けている。

安全・安心と夢のある学校づくり、生徒・教職員・保護者・地域にとって「いい学校」づくりをめざして、生徒とつながり、保護者・地域とつながる、関係機関とつながる中で、学校が地域に打って出る。そのことで、課題を共有できつつある。

学校と保護者・地域との協働

大阪府では「地域の子を地域で育てる」をキャッチフレーズに平成5年度より「ふれ愛教育推進事業」が始まり、中学校区を単位に地域コーディネーターを中心に取り組みが進められ、それが「すこやかネット」（地域教育協議会）として発展している。本校区においても、地域教育部会と学校教育部会の2本の柱で取り組みを行っており、校区の河川の清掃活動やグランドゴルフ・子育てフォーラム、そして校区の学校・園の連携事業を進めている。

昨年3学期より、ここに学校支援地域本部という3本目の柱を立て、新たに支援コーディネーターを組織した。従来の地域コーディネーターに加えて、本校の学校協議員、学校・園のPTA会長に、その任を依頼した。「学校に力を貸してください」というポスター・リーフレットを作成し、地域に掲示し、配布した。各PTAにも積極的に参加を呼びかけた。今後、図書館活動・部活動の支援・環境整備など、活動の広がりをめざしたい。学校と保護者・地域の協働による「いい学校」づくりは始まったばかりである。「いい学校」ができればいい地域ができる。まさ



ふれあい箕面川清掃

に、学校づくりは町づくりである。

授業づくりに挑戦

学校の中心課題である授業の研究は、生徒の学びを保障するための必須アイテムである。本校では生徒の「つながる力」・「つなげる力」の育成を研究テーマにしてきたが、そのことを授業づくりに引きつけて追究する姿勢は希薄であった。昨年度より、授業をビデオ撮りし、ビデオを見ながら事例研究を始めた。「協同的な学び」には遠いが、授業者も自らの授業の批評者として参加できるこの手法を定着させ、生徒の学びが成立する授業をどう作っていくのか、組織的に検討したい。秋には、その取り組みの一端を保護者・地域・外部に公開する。講師には、大阪教育大学の野口克海先生をお願いしている。すべての授業を公開し、生徒の学びの成立をめざす授業づくりの小さな一歩を踏み出した。

小中連携・一貫教育をめざして

本校の校区では、本校に大部分の児童が進学する2小学校に、兼務発令により、5年前から週1回英語科教員を派遣し、6年担任やALTとチームティ



ポスター・リーフレット

ーチングで外国語活動の授業を担当してきた(「いきいきスクール」)。また、毎年、人権教育担当者を中心に、校区のすべての教職員が参加して、人権教育の視点に立った交流を進めてきた。ここには、少数の児童が進学してくるもう1つの小学校や認定こども園も参加する。これまでは、小・中が互いの不足さを批判し合うことも多かったが、昨年度から、校長・園長同士の交流を契機に、生徒指導・特別支援教育等での交流も見られるようになった。

本年度より、本校と2小学校がともに市教育委員会より「小中一貫教育推進校」の指定を受け、中学校区としての取り組みを始めた。課題のある生徒の指導を家庭を支援する形で進めるために、小中共同で行政の力を借りて「ケース会議」を開くなど、一歩ずつ取り組んでいる。いずれは、校区のすべての教職員がどこかの部会に参加し、児童・生徒の豊かな学びと確かな学力向上をめざして、小中一貫カリキュラムの作成・実施へと動きたい。取り組みは緒についたばかりである。